

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕SNS 炎上と「文明開化の民話」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯倉, 義之, likura, Yoshiyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000161

SNS 炎上と「文明開化の民話」

飯倉義之

二〇二三年は明けて早々、不快なニュースが続いた。全国チェーンの飲食店において、利用者が共用の食器や薬味に不衛生な行為を行い、かつそのさまをSNSに動画投稿して問題となり、投稿したアカウントに抗議が殺到する事態——いわゆる炎上——を招くという事例が続出したことだ。回転寿司店でレーンに回ってきた他人の注文した寿司を横取りしたり勝手にわさびを盛ったりする、一度取った寿司をレーンに戻す、寿司やしょうゆ差しや湯飲みをなめ回してまた戻す、などの問題行動の動画投稿が発端となり、その後、うどん店や牛丼店で無料提供の薬味を共用スプーンを使って食べてまた戻すなど、同様の行動を撮った動画が次々に炎上した。無益に行なった不衛生な行為の様子をインターネットに掲示して炎上を招くという一連の行動は、不用意を超えて不可解ですらある。他者を不愉快にする行動の動かぬ証拠を全世界に発信すればどうなるかは明らかではないか。

その不可解がなぜ起こるのか。やってしまった彼ら（ほぼ若い男性である）の、報道された供述には共通点がある。その多くは「友達にウケたかった」「仲間だけにだけ見せたつもりだった」というもので、まさかそれが外部に流出するとは思っていなかったという認識がそれだ。それが広い世界に拡散されて叩かれ、困惑しているという印象なのである。撮影した動画をインターネット経由に投稿したのはあくまで仲間うちで共有するためで、その動画を無関係な第三者が見ることは想定外であり、仲間内では受ける悪ノリが無関係な第三者にはどのように受け止められるかなど、おそらく考えたこともなかったのだろう。

そうした供述を聞いたときにある民話が思い起こされた。次のような話だ。

ある村に鉄道が通り、駅ができた。開通してしばらくして、地主の家刀自が乗車するためやってきた。汽車は時刻通りに駅に入り、発車の準備に入っているが、地主の婆様とお連れのものたちは屋敷から鷹揚に歩いていて、まったく急ぐ気配がない。婆様たちが駅に着くか着かないかという頃合いに、定刻が来た汽車は発車した。それを見て地主の婆様は憤慨し、遠ざかっていく汽車に怒声を浴びせかけた。

「おおい、わしは〇〇のカカだぞー。待てやー。戻れやー」

しかし汽車は戻ることなく、黒煙を上げて遠ざかって行った。

これは「文明開化の民話」とされる、明治維新の近代化の中で新たな技術や制度と出会った人が新技術を誤解して失敗する、という話型に属する民話といえる。狭いムラ内のルールの中で、自分の都合が優先されるのを当然として生きてきた旧家の家刀自が、鉄道という外部の厳然としたルールに対応できず、外部のルールの存在すら理解できずに、ムラ内のルールを連呼して戻らない汽車に怒声を浴びせるといふ世間知らずの滑稽なさまが、地主に圧迫されている農民や小作人たちの留飲を下げる笑いになったのだろう。

このようなズレを笑う話は、近世以降、僻村の住人のももの知らずを笑う「愚か村話」や、筒井康隆が『農協月へ行く』（一九七三）でカリカチュア化した、農協（現・JA）主宰ツアーで海外に行った「おのほりさん」が繰り広げる珍道中の笑いとも共通する。

ここからSNSの炎上を振り返ってみると、炎上の当事者たちは「仲間しか見ていないはずのツール」で「仲間内のルールが優先される場」と認識していたが、実はその言動は全世界の他者に開かれていて、冷徹な社会のルールで断罪されるものであると後から気付かされてしまったのではないだろうか。大人になる過程でインターネットに触れてきた世代には、ネットは世界に通じる経路だと刻み込まれているのだが、デジタルネイティブ世代には、インターネットを通じて繋がるのが家族や友達であり、その外側に自分たちを見ている他者がいるということに無自覚な場合がある。これはデジタルを介した新たな「ムラ意識」ではないだろうか。地縁・血縁ではないデジタルの「ムラ」の点在を前提としなくては、現在のネット社会は読み解いていけないのだろう。

さらに、炎上の種となる若者の悪ふざけ動画を保存しておいて、都合のよいタイミングでTwitterに転載し、企業の株価値を操作するという「仕掛け人」の存在もネットでは囁かれている。この話もまた真偽はともかく、新たな「民話」として見つめていこうと思う。